この頃思うこと

佐藤　寧

テレビでニュースを見ていると、気が滅入るような報道が多く、閉口することがある。北朝鮮の核開発や拉致問題もその例外ではない。今日の世界で、自分の国を良くしようと思わない指導者などいるはずもないし、好んで戦争を始める指導者も考えられない。なのにどうしてこれほどまでに話がこじれ、解決の糸口を見い出せないのか。

「しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」というイエスの言葉を思い出す。イエスが名指した「敵」とは、考えを異にして彼らを迫害するファリサイ派の人々や律法学者のことであろうか。異なる思考の持ち主が「敵」の正体であるとすれば、世間は敵でいっぱいになる。よく考えてみると、そのような自分も相手から見ると敵になるのであろう。あのパウロは、かつてキリスト教徒を迫害した「敵」にほかならなかった。パウロは滅ぼそうとしていた信仰を、後に福音として告げ知らせるようになるのである。つまりかれの生き方、すなわち思考と行動が 180 度転換したのである。彼はイエスの教えに敷衍して、「たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい」と、愛の必要性を説いている。

他人との共存には忍耐が必要であり、そしてさらに理解と愛が必要になろう。このごろ忍耐の足りない人、いわゆるキレル人が増えてきたと言われている。それは人と人の触れ合いが欠如してきたことを物語っているのではないだろうか。物質的な豊かさや自由を追求するあまり、人の触れ合う場所としての地域社会や家庭が崩壊しつつあることに危惧する。人間は、書いて字のごとく他人がいて成り立つ存在である。そして、国際政治の場においても他人（他国）の存在にたいしては忍耐と理解が先行すべきであろう。

1年以上も前の話になるが、ニューヨークで起きたあの 9：11 テロ事件の直後に、炭素菌事件がアメリカで発生した。その時、なんとなく嫌な予感がした。アフガニスタンでの開戦に向けて一般市民の支持を得るために、アメリカの政府機関が意図的に発生させた事件ではないのか、と考えたからである。10 年

前に起きた湾岸戦争の時に、アメリカ政府は意図的に情報操作をして一般市民の支持をうまく取りつけた経緯があるからである。そこで、ある新聞の読者欄に炭素菌事件はアメリカ政府による意図的な企みの懸念がある、との趣旨の手紙を送った。勿論、この手紙は新聞に載ることがなかった。

思うに、昔からこのような事件がなかったわけではない。私が生まれる前に起きた太平洋戦争はどのような憎しみの結果だったのか。反省さえすれば、将来、あのような悲惨な戦禍が避けられるのだろうか。私はこの頃、先に引用したイエスやパウロの言葉を思い出すたびに、不思議と、他人にやさしくなれるような気がする。

（さとう　やすし
所員・教養教育センター教授）